

第1回 美和ダム再開発 湖内堆砂対策施設検討委員会 議事概要

日 時：平成25年7月8日 午前10時～12時

場 所：ウイंकあいち 1110 会議室

出席委員：鈴木委員長、角委員、檜谷委員、溝口委員、櫻井委員
渡邊委員（代理：久保）、木村委員、小林委員

委員会の概要：

1. 委員会の運営について

- ・委員会の設立趣意（案）及び規約（案）について、事務局から説明が行われ、案の通り決定することが承認された。
- ・委員の互選により、委員長に名城大学 鈴木名誉教授が選出された。

2. 委員会議事の概要

（1）情報公開について

○委員会の情報公開方法については、次のとおりとすることが決定された。

- ・委員会の情報公開については、議事概要及び資料の公表により行う。
- ・委員会終了後、事務局は速やかに議事概要を作成し、各委員の確認を得た上で、資料と合わせ事務所のホームページに掲載し、公開する。

（2）美和ダム再開発におけるこれまでの経緯

○美和ダム再開発事業のこれまでの経緯について、事務局から説明が行われた。

各委員からいただいた主な意見、質問等は以下のとおり。

<土砂収支計画>

- ・土砂収支の新計画では、分派堰を越える土砂量が既往収支計画の2倍となっており、放流土砂量も16.3万 m^3 となっている。分派堰を越える土砂量が湖内に留まるのか、ダム下流に排砂されるか、放流土砂量の関係と合わせ検証すること。
- ・土砂収支については、発電放流、ゲート放流（クレスト、オリフィス）などからの放流土砂のボリュームを個別に整理すること。

（3）施設計画について

○湖内堆砂対策施設について、事務局から説明が行われた。

各委員からいただいた主な意見、質問等は以下のとおり。

<堆砂対策の対象となる土砂粒径>

- ・貯水池内の集泥範囲の堆積土砂が土木研究所の実験で使用した土砂と同様の粒径か確認すること。
- ・土砂粒径は、表層と同様の材料が鉛直方向に堆積するとは限らないので、集泥範囲の堆積土砂の粒度を判断する場合は注意する必要がある。
- ・分派堰設置後の湖内への流入土砂量は、当初の想定通りウォッシュロードが主となって

いるか確認すること。

- ・砂分を含む土砂を集泥し、ストックヤードに集積したとした場合の排砂の状況を確認すること。
- ・美和ダム貯水池のボーリング結果からは、堆積層下部に粗粒砂の堆積が見られるので、集泥対象としているウォッシュロードを確実に採取する方法を考える必要がある。

<排砂による下流への影響>

- ・土砂バイパス施設による排砂に砂分が混入した場合の排砂施設への摩耗等の影響、下流河川や高遠ダムへの影響等を把握する必要がある。
- ・ストックヤードの運用により、一時的に濃い濃度の土砂を放流することとなるため、下流環境への影響等、これまでのモニタリング結果を踏まえ整理が必要である。
- ・ストックヤードの運用による下流への影響検討は、実洪水における土砂濃度の上昇・下降要因等を考慮し、整理すること。
- ・湖内堆砂対策施設運用後の土砂バイパス施設及び下流河川への影響把握のためのモニタリング計画を検討すること。
- ・土砂バイパス施設運用以降の高遠ダムの堆砂実績を踏まえ、高遠ダムへ堆砂影響を与えない土砂粒径を検討すべきである。

<排砂方法の課題>

- ・洪水規模や継続時間は一律ではないため、一回の洪水でストックヤードの集積土を排砂しきれない場合、ストックヤードの集積土下層部は圧密により流下・浸食されにくくなるため、集積土の含水比管理や集積土を流れやすくするための対応策も検討すべき。
- ・貯水池内の集泥範囲に自然に土砂が集積するような工夫（局所的に堆積させるなど）により、コスト削減を図れないか。

（４）施設設計に向けた検討方針

- 湖内堆砂対策施設について、今後模型実験等により実現性を確認すると共に設計へ反映するための考え方について、事務局から説明が行われた。
各委員からいただいた主な意見、質問等は以下のとおり。
- ・ストックヤード内の攪拌を促すため、杭等の流れを乱すような構造物を設置するなどの工夫について考えてはどうか。
- ・ストックヤードの運用により、放流濁度が急激に上昇する可能性があるため、実験により状況を把握する必要がある。

（５）今後の委員会の予定

- 今後の委員会の実施時期、議題内容について、事務局から説明が行われた。
各委員からの意見、質問等は特になかった。

（６）その他

- 次回委員会は８～９月を予定する旨、事務局より説明した。

以上